

大丈夫っ?
お兄ちゃん?

FOR ADULT



……って
なんで

ヒナギクさんは
今日一日
綾崎ハヤテ君を
「お兄ちゃん」と
呼ぶことに決定

はあ？

何よ
それっ

決まってる
じゃない
罰ゲームよ

それとも
勝負に負けた上に
罰ゲームからも
逃げるなんて

そうだぞ
ヒナ

このTCGで
負けたんだから
当然だよ



当然何かしらの
イカサマを
されたのだが

そもそも
そーゆー思考が
無いので
気づかないヒナ

そんな負け犬
まっしぐらな
コトするのかしら？
会長？





所詮はゲームだしな

たまには逃げるのもいいんじゃないか？

そーだよね 所詮はゲームだからね

.....



あーっもう 分かったわよ

皆さん ああ言ってるしいいんじゃないですか？

ダメ押し

今日だけだからねっ！



ゴメンナサイ 会長

よーし さっそく ハヤ太くんを 呼び出し！

えっ？ ちよつと？

弱みを 握られて いるので 逆らえない

「大丈夫っ？お兄ちゃん？」
2008年 3月23日発行

- ◇ここで、パソコンが変わってます。
設定に手間取って思い通りでは
なかったっぽいですが・・・。
- ◇ヒナギク本が続いて
同じことばかりになってないか？
とゆーことで、
「お兄ちゃんとか言わせる」
「オレンジのひらひら」
「軽く拘束してみる？」
とかとか、
自分以外の人からテーマをもらってます。
この辺りからだと思うのですが。
うちのヒナギクさんが変になったのは・・・。





「げ」？



何だ？
ヒナギク？
いきなり
失礼だな

あつ
ごめんなさい
ナギ…

このまま
ナギとの会話だけで
何とか逃げ…



げっ

…って

この敗北感は

なによっ!?



これはこれで何か嫌だわっ!!

せめてハヤテ君一人だったなら良かったのに…

ざ〜ん

は…ハヤテっヒナギクが何か怖いぞ…

ですね…



……っ

ご…ごめんなさい

ナギ…っお兄ちゃんっ

ひくひく?

あー…
言っちゃった…

えっ？

お…
お兄ちゃん？

何だハヤテ
お前
そんな趣味が？

ちよ…と
お嬢様

僕は何も
知りませんよ

とにかく
私は原稿を
やらないと
いけないので

なっ

後は任せた
ハヤテ
お兄ちゃん

どーしたん
ですか
ヒナギクさん？

え？

…で

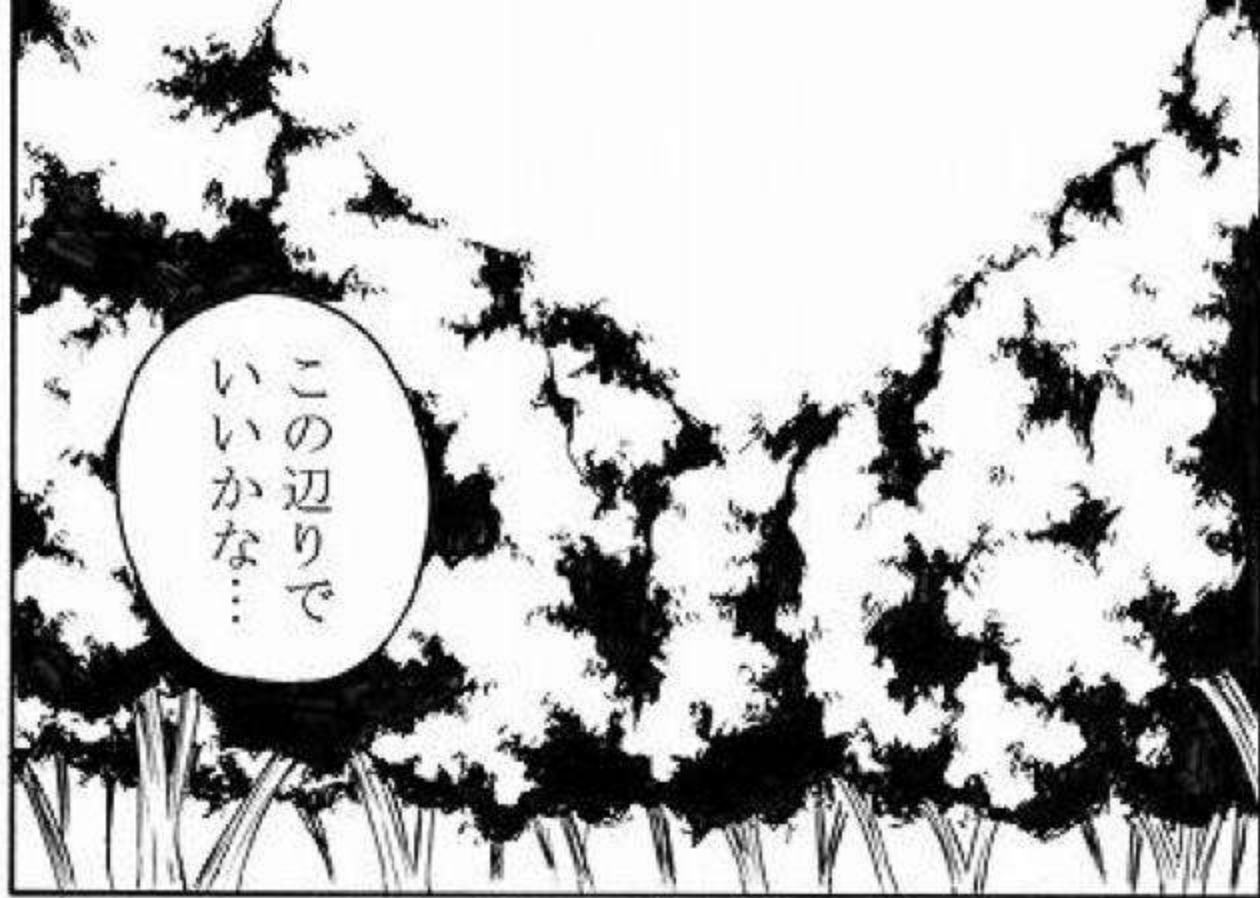


ががが



へっ？

ちよつと
ハヤテ君？



この辺りで
いいかな…



ハヤ…

お兄ちゃん？

こんな所で
何の用？

ヒナギクさんが
いつまでそーやって
いられるか
試そうと思つて

あれ？
ヒナギクさん

んっ

「お兄ちゃん」じゃ
ないんですか？



お...

お兄ちゃん

こんな所で
するのは
ちよつと...

ずるずる

びくっ

あっ

じゃあ

がんばって
くださいね
ヒナギクさん

お兄ちゃんって
言い損ねたら
最後までココで
しますから

ハ……っ

危なかつた
ですね

それから

やあっ

歩道から
それほど離れて
いないので

お兄ちゃん！
そんなの
私が圧倒的に
不利じゃない！

あまり
大声を出すと
見つか
りますよ



うー……っ

ヒドイよ
お兄ちゃん

思ったより
がんばるじゃ
ないですか

んっ



あっ

ひあっ

お兄ちゃん！
やだよ
ハヤ：

ちよっと

どこまで
こんな所で
するのよ

びく
びく





ヒナギクさん

そんな大声
出すと
気付かれますよ



?
なに?

え?
何が?

逃げるん
ですか？

あうっ

びん

かり

そんなこと
ヒナギクさん
らしくないですよ

これ
お借り
しますね

あっ

しゅる



これで
逃げられなく
なりましたね

カッしっ

ちよっ…
ちよっ…

じゃあ
いきましようか
ヒナギクさん

ふえ？

ハヤテ君
まだ私
まちがえて…

もう少し
頑張れたらって
思っていたの
ですが…

やっ

グ
グ
グ

ひ
…
っ

ヒナギク

本当に
いきますよ

あー
惜しかった
ですね



あっ

びくっ

あっ

びくっ

あっあっ

ダメ...っ
ハ...ヤテくん

や...だ



あっあっ

びくっ

すごく
気持ちいい
ですよ

ずい
ずい
ずい

んっ

おずおず

あっ

おっ

いいですね
ヒナギクさん

やっ

そん...な
深...っ!

びび
びび

奥に
当たってるの
分かりますか?

逃げられない分
いつもより
深くまで突ける
じゃないですか

あつ

そ…ん
なに…

もっと奥まで
いっぱい突いて
欲しいんでしょう？

ピクピク

ぬるぬる
びしょ
びしょ
びしょ
びしょ

ハヤテくん
だめえっ

ち…っ

なに言ってるん
ですか？
こんな
ドロドロにして

ちが
…うの

びっ



ふいにふた

そ……っ
ふた

そ……んな
こと……ない



ひあああ！

ピクッ
ピクッ

しり

しり
しり

じゃあ
こっちの方が
良かった
ですか？

ピクッ
ピクッ

あつ

ぎゃうっ



やあ
あああつ

あ…っ

ぬちゅ

あつ

がくん

がく
がく

あああつ!!



でも
僕がまだ
なんですよ

ぐいっ



もう
イツたん
ですか？

勝手に
抜かないで
下さいよ

がく
がく



ヒナギクさん
そんな
大声出して
良いんですか？

やっ



仕方ないなあ
コレでも
啜えて下さい

ひらっ

ふあっ



じっ

んむっ



あっ

ビクッ

ガク
ガクッ

だめっ
ハヤテくん

おぬちゅっ
おぶっ
おぶっ

んぐっ

コック

これで
大きい声は
出ないですね

んむっ

ブブッ

ズッ

んんっ

それじゃあ
遠慮無しで
いきますよ

スッ
スッ
スッ
スッ
スッ

んー

ビクッ
ビクッ

ンッ

んっ

ヒナギクさん
本当は
こーゆーの
好きでしよう？

こんな所が
良いなんて
すごくエッチ
なんですネ
ヒナギクさん

ズツ
グッ

しゅわっ

ズツ
ズツ

いつもより
イイじゃ
ないですか

おっ

ガッ
ガッ

ジュー
ズツ

ズツ
ズツ

ガッ
ガッ

んっ

くりっ

んんっ



ガッ

ガッ

ふっ

んぐっ

ズッ
ズッ
ズッ

どうしました
ヒナギクさん?

びちゃっ
しちやっ

がっ
がっ

まだ
物足りない
んですか?

仕方ない
ですねえ

びるっ

びんぐっ

んんうぐっ

ふぐっ

これで
どうですか

ふぐっ

やっだめっ
イツちやう…っ！

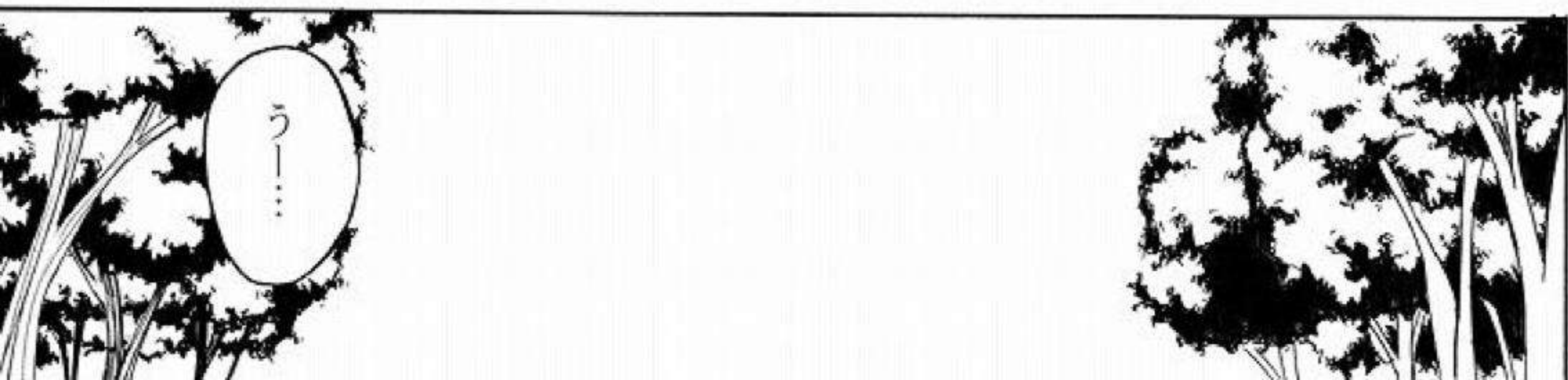
がらんっ

んんっ！！

びんびん

びんびん







た…

仕方ない
ですねえ

ひあつ

とりあえず
生徒会室で
良いですか？

立ってない…

待って
ハヤテ君っ

ちよっ



高いところが
怖いから
イヤとかなら
聞きませんよ

そ…
そうじゃ
なくて…

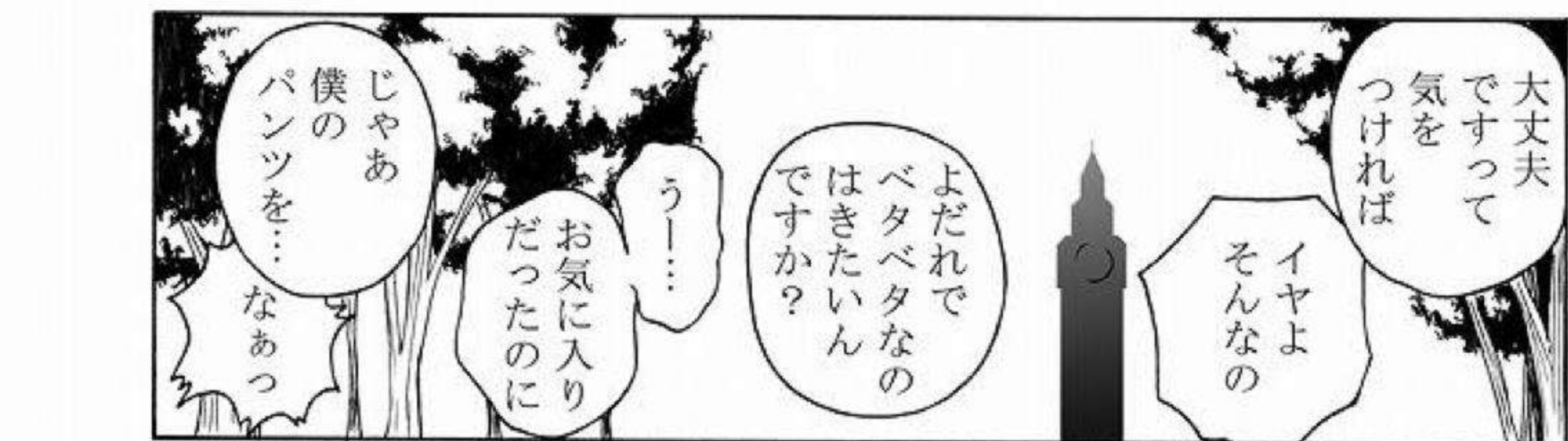
ま…

ぎゅっ



まだ…

ぱんつ
…はいて
ないの



大丈夫
ですって
気を
つければ

イヤよ
そんなの

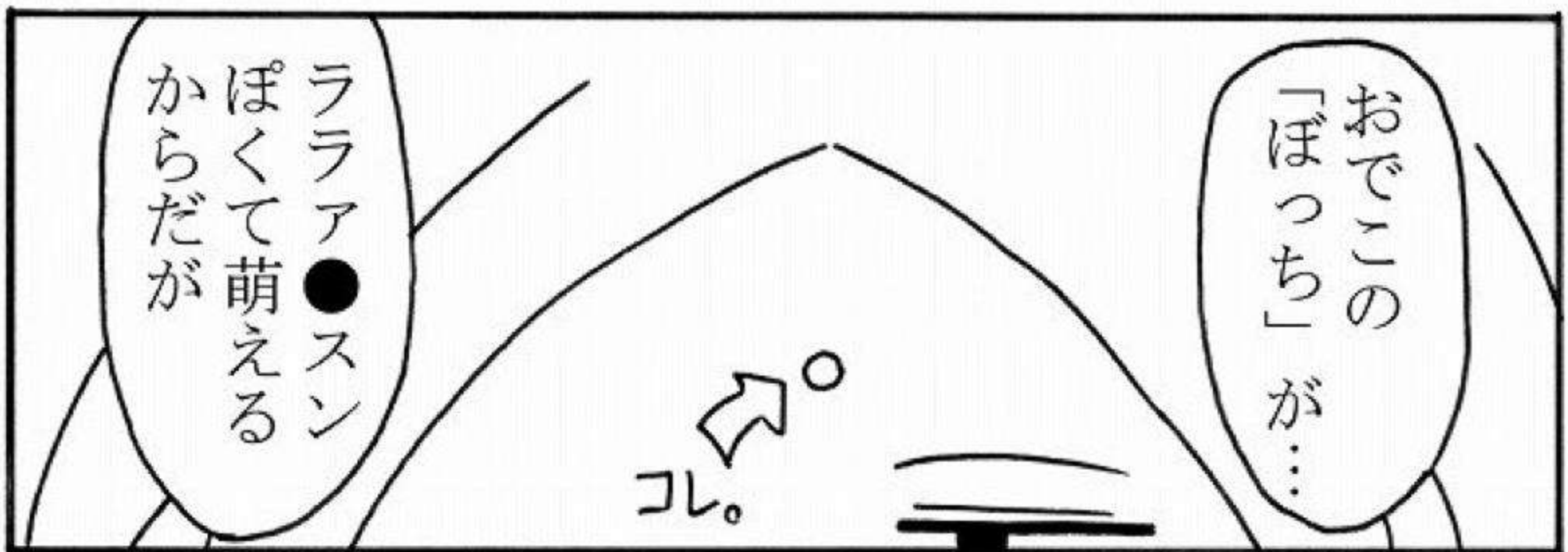
よだれで
ベタベタなの
はきたいん
ですか？

うー…

お気に入り
だったのに

じゃあ
僕の
パンツを…
なあっ

本当は、まだ続いたけど終わり



(えっとー……やっぱりこれは夢……なんだろうか?)

ハヤテはうまい反応を思いつかずに、とりあえず指先で頬を搔いた。

うらかな日差し。思わず日向ぼっこをしながらまどろみたくなる陽気であることに違いはないが、ハヤテは歩きながら眠る……なんて器用な芸当を自分ができるとは思えなかった。

事実、今日、この学校からの帰り道で記憶が途切れた覚えはないし、彼を包む世界は現実そのものだった。

けれど、不思議の国の入り口は、意外と突然現れるものなのかもしれない。

ハヤテは頬を搔いていた指を下ろすことも忘れて、突如発生した不思議の扉の前に立ち尽くした。

彼の目の前には制服姿の白皇学院生徒会長、桂ヒナギクの姿がある。あいかわらず、桃色の髪はサラサラで、意志の強そうな瞳が印象的な、完璧な美少女だ。全校生徒の憧れ。校外にもファンは多いという。

そんな彼女が今、ハヤテを見上げて微笑んでいる。

わずかにはにかんだ笑みは、彼の保護欲と支配欲を同時に疼かせる。

有り体に言えば、食べてしまいたいくらいかわいい。しかも、おあつらえ向きに、周りに人はいない。これは男としておいしい状況かもしれない。今の彼女なら、細い肩を抱き寄せて腕の中に閉じ込めてしまっても、許されるような気さえしてしまう。それでもハヤテは手を出さなかった。

正確には固まって、それどころではなかったと言える。

「もう、お兄ちゃん！ 聞いている？」

目の前の少女は、耳に心地よい声で唸りながら、少々ムツとしてハヤテに食って掛かった。

ツンデレな妹は好きですか？

鷹宮 沙玖羅

白くしなやかな指で彼の執事服の襟をきゅつと掴んで軽く揺すっている。

当然、彼はされるがままだ。

「聞き間違い……じゃないよな？ ヒナギクさん、今僕のこと『お兄ちゃん』って……」

脳内神経が都合よく勘違いしている可能性もあるため、ハヤテは念には念を入れるべく、慎重に現状把握にかかった。

（たしか僕はヒナギクさんに届け物をするために、ヒナギクさんのお家に来たところ……だったような気がするんだけど……）

現に彼が佇んでいるのは、豪邸とは呼べないまでも、品のいい洋風の家……の玄関先だった。

何度か中にだって入ったことがある。夜を明かしたことで……であるくらいだ。

だからここは間違いなくヒナギクの家。これだけは硬直した脳内でも断言できる。

しかし、だからといって、家に帰ったら妹が出迎えてくれる、なんて泣きたくなるくらいうれしいシチュエーションではなかったはずだ。

こんな都合のいい展開が待ち受けているとは、限りなくハヤテの願望をおいしいところ取りで具現化した夢である可能性が高い。非常に高い。

だからこそ、最後の最後に確認をする。

ここで現実に戻ってしまったら泣くに泣けないけれど。

「すみません、突然のことですうまく聞き取れなかったみたいなんです……」

聞き取れなかったわけではない。ただ耳が願望を乗せて受け取った可能性もあるということだ。

「えっ……」

ヒナギクは逡巡すると、恥ずかしそうに頬を染めた。

「もう……今度こそ、ちゃんと聞いててよ？」

彼女は俯いて息を整えると、再びハヤテを見上げた。ほのかに染まった頬が殺人的にかわいい。もうダメかもしれない。

「お帰りなさい、お兄ちゃん！」

花がほころぶような……とはよく言ったものだ。

ハヤテの中で、何かが大に切れる音がした。

彼はためらいなく彼女を抱き寄せると、ぎゅうつと腕の中に閉じ込めた。

「ふえ!? ちよっ……!」

「ただいま、ヒナギクさん」

（もういいや。これは夢。夢決定！ それならとことん楽しんでやるだけです）

ハヤテはヒナギクのすべすべの頬に頬擦りした。

……と、とりあえず流されてみたわけだが……。

ハヤテは少々居心地が悪い風体で正座した脚をもぞもぞと動かしてみた。

目のやり場に困る……というわけではないが、あまりじろじろと眺めるのも良心が痛む。そもそも他人のプライベート空間というのには、おおっぴらにくつろげるものではないだろう。

結果、ハヤテはひとり、禪の修行僧よろしく微動だにせず、部屋の主を待っていた。

「お兄ちゃん、今日はゆっくりしていいけるの？」

不意に声がかかると、二人分のお茶をトレイに乗せたヒナギクが部屋に入ってきた。扉を片手で器用に閉める。

今彼らがいるのはヒナギクの部屋だ。女の子の部屋にしてはシンプルなほうだが、きちんと片付いている感じがしつかり者のヒナギクらしい。ナギとはずいぶん違いだ。

ハヤテは彼女からトレイを受け取ると、テーブルの上に置いた。

「え、ええ、……大丈夫ですよ。今日はヒナギクさんとゆつくり過ごしたいと思っっていますから」

「本当!？」

（おっと……!）

ガタンとテーブルが鳴る。

ハヤテは脅威の反射神経で、こぼれそうになるお茶を持ち上げると、再びテーブルの上に落ち着けた。

（ふう、あぶないあぶない）

一安心して少女を見遣ると、当のヒナギクは瞳を輝かせて身乗り出してきた。いつもの彼女よりも、行動が少々幼い気がする。だからというわけではないが、彼女が両腕で胸を挟んで強調する形を取っても、現れたのはほんのささやかな膨らみだけだった。そして胸が目立たないのは制服を着ているから、というわけでは残念ながらないのだ。

ハヤテは視線をヒナギクの顔に戻し、いつもの無害なスマイルで笑んだ。

「もちろんです。いつもあまりかまってあげられませんでしたからね、今日は思いっきり甘やかしてあげますよ」

「えっ」

言葉にして『甘やかす宣言』をすると、ヒナギクは頬を真っ赤にして俯いた。もしかしたら甘やかされ慣れていないのかも

しれない。

「やつやだ、べつに甘やかしてほしいなんて、思っていないんだからね? 誤解しないでよ。私はお兄ちゃんが久しぶりで寂しかっただろうって思っ……それで……私が……」

弁解しようとして、さらに赤くなって言いよどむ。

本当に彼女は意地っ張りで、素直じゃなくて。だけどそんな反応すらも、初々しくてかわいらしい。

だからつい言動がエスカレートしてしまう。

「ヒナギクさん」

ハヤテはヒナギクを手招きすると、正座していた脚を胡坐に組みなおした。

「ここに座ってください」

さも当然のごとく自分の膝の上を指差す。

「えっ!？」

案の定、ヒナギクは戸惑ってしりごみしている。

まあ、当然だろう。いきなり男の膝に座れと言われて、戸惑わないほうがおかしい。

ふつう、年頃の男女ならば実の兄妹だってこんなことはしない。

けれど、今ならば構わないだろう。

なぜならこれは、夢だから!

「ほら、遠慮しなくていいんですよ。今日くらいはお兄ちゃんにいっぱい甘えてください。そのほうが僕もうれしいですから」

「お兄ちゃん……も?」

「はい!」

「……しよ……しよ……しよ……しよ……お兄ちゃんがどうしてもっ

て言うなら、今日くらいお兄ちゃんの好きなようにさせてあげる。感謝してよねっ」

満面の笑みでハヤテが応えると、戸惑いながらもヒナギクはハヤテの膝の間に腰を下ろした。

その瞬間、彼女の髪から、ふわりとシャンプーの香りが漂う。ヒナギクは、座るとハヤテの胸にすっぼりと収まった。

男にしては華奢な見た目のハヤテではあるが、こうして密着すると、女の子との体格の差は歴然である。

そつと腕を回して閉じ込めてしまえば、凛として風格漂う生徒会長も、実は頼りない身体つきの女の子なんだと実感できる。

「……お兄ちゃん？ ああの……」
「なんですか？」

ハヤテはヒナギクをぎゅうつと抱きしめると、ぬいぐるみにするように、彼女の首筋にすりすりしていた。

「もうっ、だから何するのよ！ お兄ちゃんは何がしたいわけ!？」

照れ隠しにそうわめいたきり、邪険にもできないヒナギクは、ただ困ったようにハヤテの様子を窺っている。

その間にも、ハヤテの行動は際限なく度を越えていく。
「えつと……お兄ちゃん？」

「はい？」
ハヤテの手は少しずつ際どい場所に移動していき、ヒナギクの耳にかかる吐息も熱い。

彼女は、ハヤテの手が何かをするたびに、小さくびくびくと反応していた。

おそらく本人に自覚はないのだろうけれど。
（ああ、もう、本当に……）

「かわいいですね」
「ふえっ？ ……あつ！」

ヒナギクは今度こそピクツと大きく反応した。

急に高くなった体温で、彼女が真っ赤になっているのがわかる。腰をもじもじさせ、少しでも前に移動しようとするのを、彼女のウエストに腕を回したハヤテが阻止する。

「えつと……あの……」
「どうかしましたか？ もっと思い切り甘えてくれてかまわないですよ？」

彼女の脚が小刻みに震えている。
意識しているのが丸わりの行動に、そつとハヤテはほくそえむ。

彼は、大きくなっていた自らのモノを、さらにヒナギクの尻に押し付けた。

「あつ！」
彼女の身体が再び跳ねる。

ハヤテは両手をヒナギクの衣服の上に滑らせた。
左手で胸を、右手で陰部を弄る。

「ひっ！ あつ、そんな……っ」
ヒナギクが身を振ってなんとか逃れようともがく。

けれどそれを赦さずに、ハヤテはショーツの横から指を突き入れた。

「ひっ！」
ヒナギクが喉を鳴らし、背を強張らせる。

「どうしてっ!? お兄ちゃん！」
驚愕した彼女は、膣のナカの異物を追い出そうとしてきゅんと締め付けた。

「かわいいですねえ。もっと甘えてください。ほら、僕にもたれて。僕に全身委ねてしまってもいいんですよ？」

「そんなんっ、……ああつ！」



ハヤテの指がヒナギクのナカで触手のように自在に動く。感じるポイントを掠められるたびに、彼女の腰がビクビク震える。

「ヒナギクさん」

「な……によ」

いいように弄られていてもなお、ヒナギクは気の強い返事をする。

そんな意地っ張りなところがかわいくてしかたがないハヤテだ。

つい意地悪を言ってみたくなる。

「今日はスパッツを穿いていないんですね」

「へっ？」

焦りを含んだ返事。

（あ……、わかりやすいな）

ハヤテは彼女がこのような行為を期待して彼を待っていたのだと、確信した。

思えば、忘れ物だってあからさまだったのだ。あとから彼が来るのをわかっていて、わざとらしく彼女の机の上に置いてあったのだから。ハヤテが見て見ぬフリなど、するはずがないと十割の信頼を置いている。

彼はそんな彼女のいじらしさをたまらなくかわいいと思う。

素直に口にできないから、いろいろ策を巡らしてハヤテに触れてもらおうとする。

素直じゃなくて負けず嫌いで、でも彼にとって誰よりもかわいい人。

ハヤテは苦笑すると、意地っ張りな少女に、その先を促してやる。

「どんな下着を穿いてるんですか？」

ハヤテは楽しそうに言うと、彼女のスカートを捲り上げた。

「やっ！ だめっ！」

油断していたヒナギクが焦ってスカートを押さえようとしたが、数瞬遅かった。

凝視したハヤテが目を瞬く。

（これは……）

「オレンジのヒラヒラ……」

「やだあ！ 見ないでお兄ちゃんっ！」

なおも彼女は隠そうとしたが、内部を弄る指の動きを激しくすると、抵抗は格段に弱まった。

「これは、僕に弄られるのを期待していたんですか？」

笑いを含んだ声でハヤテは問うと、ヒナギクは羞恥に目元を染めた。

「ち……が……」

口では否定していても、身体はハヤテの愛撫に悦んでいる。内部を弄る指を2本に増やして掻き回せば、湿った音が響き、

潤滑液が彼の指に絡みついた。

「や……だ、汚れちゃう……。お気に入りなのに……」

「よくお似合いですよ。僕のためにお気に入りを穿いて待っていてくださったんですね」

「そんなんじゃ……ひあっ！」

ヒナギクの肩がビクンと震えた。

「あ……あ……、あ……っ！」

熱を帯びた嬌声が喉から零れ落ちる。

縦横無尽に動き回っていた刺激を一点に集中させれば、彼女は苦しそうな息を吐いて身体を小刻みに震わせ、ハヤテの指をきゅんと締め付けた。

「ここが気持ちいいんですか？」

「ここが気持ちいいんですか？」

「んやっ……！」

こりこりしたしこりをぐいぐい押すと、ヒナギクはたまらず涙を浮かべた。

「おに……ちやあん……っ！」

ヒナギクは頭を左右に振って刺激をやり過ぎそうとするが、新たに与えられる衝撃に、ただ喘ぐばかりだ。

「ひっ……あ……！」

ハヤテが少しでも指を動かせば、従順な彼女の身体は、応えるように柔肉をヒクつかせた。

巧みな指の動きに、着実にヒナギクは高みに引き上げられていく。

縫るような嬌声が甘く響き、秘部がきゅんきゅんとハヤテの指に吸い付いてくる。

膣口がひととき強く締まった。

しかしそこで、彼は突然指を引き抜き、彼女を弄る手を止めた。

当然、ヒナギクから不満の声が漏れる。

「や……どうして……！」

イク直前の敏感な身体を突然投げ出されて、もどかしさにととう溜めていた涙を零れさせた。ハヤテの膝に座る彼女の太

腿が、さざなみのごとく震えている。

「ああ、泣かないでください。やめたりなんてしませんから」

「ほ……んと？」

「はい。その代わり……」

ハヤテはヒナギクを膝から下ろして、向かい合うようにして目の前に座らせた。

「お兄……ちゃん？」

不安げに瞳を揺らす少女に対し、ハヤテはにっこり微笑んだ。

「まずは下着を脱いでください」

「へっ？」

このまま押し倒されるものだと思っていたヒナギクは、ハヤテの優しくない一言に、肩を強張らせた。

「……自分……で？」

「もちろんです」

「……っ……」

言うとおりにしないと絶対に触れてもらえないと悟ったヒナギクは、ハヤテに背を向け、おずおすと下着に手を伸ばした。けれどそんな彼女の腕を掴み、ハヤテは強制的に自分のほうを向かせる。

「だめですよ。ちゃんと脱ぐ姿を見せてくれないと」

「……うっ……」

耳まで真っ赤に染めながらも、ヒナギクは素直にハヤテのしている前で下着を脱ぎ去った。

ヒナギクのお気に入りだというオレンジ色でレースとフリルがたくさんついた女の子らしい下着は、彼女から溢れた粘液で股の部分がすでにぐっしりと湿っていた。

「ヒナギクさん、もうドロドロなんですね。僕に弄ってほしくてたまらないんですか？」

「……う……おにーちゃ……お願……」

瞳をうるうるさせながら、ヒナギクが懇願する。

その姿のあまりの破壊力にハヤテの理性が一瞬にして吹っ飛びそうになったが、そこは男の意地でぐっと堪えた。ここで狼になってしまったのは、せつかくの妹設定をぞんぶんに楽しめなくなってしまう。

ハヤテはゆっくり深呼吸すると、作り笑顔を浮かべた。

「いいですよ。じゃあ座ったまま脚を開いて、お兄ちゃんによ

く見せてください」

「……ひつく……」

ヒナギクはあまりの羞恥にとうとう嗚咽を漏らした。

けれど素直にハヤテの言葉に従う。

いちばん恥ずかしい箇所をあらわにしてもなお、可憐さを失わないヒナギクの姿に、ハヤテは喉を鳴らした。

「いいですね。ヒナギクさんのココ、キレイなピンク色で、物欲しそうにヒクヒクしていますよ」

ハヤテによく見えるように脚を大きく開いたヒナギクは、恥ずかしさに涙を浮かべながらも、自分自身の痴態にさらに興奮を煽られているようだった。赤く熟れた秘裂が割れて、性欲を煽る匂いを放つ液体を、中から滴らせている。

「お兄ちゃん……ねえ、お願い。はやく触って……」

秘肉をヒクつかせながら、ヒナギクがねだる。

淫らな自分をハヤテに見られていると思うだけで、彼女の割れ目からさらに蜜が溢れた。

「まだだめですよ。もっとよく僕に見せてください」

「……だって、これ以上は……」

「できるでしょう？ ヒナギクさんのもつと奥まで、僕に見せてください」

ハヤテがお願いではなく命令すると、ヒナギクの震える指先が自らの媚肉をとらえ、左右に大きく割り開いた。

イク寸前まで高められた身体はトロトロに蕩けていて、かたくななはずの肉は従順に秘密の入り口をさらけ出していた。

大きく開かれた女性器は、襞を刻む内壁までもあらわにし、淫蕩なさざめきをもってハヤテを誘った。

ハヤテの喉が鳴る。

「よくできましたね」

彼はヒナギクの間近に迫ると、涙に濡れる頬に口吻けをした。

「……お、にいちちゃん……もう……」

ヒナギクが懇願する。

途中で放り出された身体が疼いてしかたないのだろう。上気して桃色に染まった滑らかな身体が小刻みに震えている。

プライドの高い彼女にここまでの痴態を強要できたのだから上出来だろう。

ハヤテはやつとすがるヒナギクに許しを与えた。

「もういいですよ。続きはお兄ちゃんがしてあげます」

ハヤテはヒナギクの手を外させると、彼女の太腿を指でなぞった。

「んっ……」

軽く触れただけなのに、彼女の鼻からは熱い吐息が抜ける。

「お兄ちゃん」

やつと触れてもらえる悦びに、彼女の身体が素直に反応した。新たな蜜を溢れさせ、早くハヤテを受け入れたいと主張する。

彼女の臀部と床は、すでに漏らしてしまっただのかと錯覚するくらいに、光を反射する液体で濡れていた。

「イケナイコですなえ、こんなに漏らして。お兄ちゃんがすぐにキレイにしてあげますからね」

口の端で笑うと、ハヤテはヒナギクがしていたように両手で左右の肉をぐいっと開いて、奥の襞に直接舌を這わせた。

「ひいっ！……っ、ああっ！」

ヒナギクの秘肉がきゅっつと締まってハヤテの舌を締め付けようとするのを、両手に力を入れて無理やり開かせておく。

舌を蠢かせるたびに、ヒナギクの身体がおもしろいくらいにビクビク跳ねる。内壁も痙攣して、感じているのが手に取るようにわかった。



「お兄ちゃんっ！ やあっ！」

ヒナギクが叫びながら、両手でハヤテの頭を自分の股間から遠ざけようとする。腕には必死の力。けれど、言葉どおり、本当に嫌なわけではないのだろう。事実、彼女は膣をきゆうきゆう締め付けて、嬌声を上げながら悶えているのだから。

ハヤテは穴から舌を引き抜くと、前のほうで主張するコリコリに尖った先端を口に含んで強く吸い上げた。

「ひああああんっ！」

彼女の太腿が、間にいるハヤテを挟む。膣口がきゅんっとなじり、先端が熱を持った。

「お兄ちゃん！ やだあっ！」

「……………」

錯乱したかのようなヒナギクに髪を掴まれて、痛みにはハヤテは眉をしかめた。いつもの彼女らしからぬ行為に、さすがに彼も訝しんだ。『妹』だから、というわけではなさそうだ。

（嫌なはずないんだけどな。こんなに感じてるんだし。あ、もしかして『感じすぎてイヤ』とかいうものか？）

一応予測を立てて尋ねてみる。

そういえば以前にもそんなことを言われた気がする。普段は鉄壁の生徒会長のくせに、エッチになると身体が敏感すぎて、かわいらしさが勝ってしまうのだ。

今回もそんなことだろうと、考えていた。嬉しさと愛しさに、自然と頬が緩む。

「ヒナギクさん、どうして嫌なんです？ ちゃんとやってくれないとわかりませんよ」

かわいい答えを期待する。

けれど、ヒナギクの返答は意外なもので、予想外の反応にハヤテはおおいに虚を突かれた。

「舌ばっかり、いやあ！ お兄ちゃんのおっきいのがいいのおっ！」

ついに彼女は幼い子供のように泣きじゃくり始めた。

「……………」

驚いたのはハヤテのほうだ。

彼は慰めるのも忘れてそんな彼女をまじまじと見つめてしまった。

とんでもない殺し文句を聞いた気がする。こんな妹がいたら、たしかに最強かもしれない。

「え……………」

意地っ張りなヒナギクにしてはありえないくらいストレートな要求に、ハヤテのほうが軽く固まっていた。

『イヤ』な理由がそういうことなら、ハヤテだって悪くは思わない。むしろ、そこまで求められれば、男冥利に尽きるというもの。すでに限界近くまで膨れ上がったハヤテの欲望は、直接的な刺激を求めて、ドクドクと激しく脈打っている。

「しかたないですね。かわいくおねだりできました。褒美です。お兄ちゃんのお腹いっぱい食べさせてあげますよ」

余裕を削ぎ落とされたハヤテは、すばやく猛り狂う陰茎を取り出すと、ドロドロのヒナギクの腰を持ち上げて、ためらいなく根元まで突ききった。

「きやああああっ！」

太い茎も敏感な先端も、一様に膣壁が圧迫した。

ハヤテを食い締めたまま、ヒナギクの媚肉はヒクヒク媚びて次の刺激をねだっている。

「ヒナギクさん、次はどうしてほしいですか？」

「そ、そんなこと私に聞かないでよ！ お、お兄ちゃんのようにすればいいじゃない！」

まだ羞恥を拭いきれないのか、ヒナギクは視線を逸らして意地を張った。

「余裕ですね、ヒナギクさん。だったら本当に僕のしたいようにしますよ」

ハヤテはいったん腰を引くと、次いで根元ギリギリまでねじ込んだ。乾いた音が大きく響く。それを彼は可能な限り素早く、力強く繰り返した。先端に子宮口の硬い感覚がリアルに届く。肉襞の形も隧道の形も、ハヤテの敏感な器官を通して彼に届いた。

「ひっ！」

ヒナギクの背がビクンと跳ねる。

その箇所を集中的に突いてやると、弓なりに反らされた背が小刻みに震え、膣内にいるハヤテを想像もつかない圧力で締め付けた。

「……あ……あ、あ……っ」

「ここですか？　ここがイイんですか？」

なおもハヤテは硬く屹立した肉棒の先端で、イイ反応を返す箇所を突く。

「べ……っつに、悦くなんか……ない、んだか……ひあうっ！」

「かわいいですねえ。でも、これでもそんなこと、言えますか？」

彼は突かれ続けて過敏になっていくその場所に、今度は回転を加えながら埋め込んだ。やわらかくほぐれた内壁が、柔軟にハヤテの先端を自らに埋め込んでいく。隧道の形が変わるほど深く刺せば、ヒナギクは今度こそ涙を散らしながら音を上げた。

「だめっ！　そこばかり、しないでえっ！」

ハヤテはニヤリと口端を上げた。せつかくこんなにかわいいヒナギクが見られるのに、やめてあげるつもりなどさらさらない。

「そんなこと知りません。僕は僕のしたいようにしますから」
「お兄ちゃんのいじわるっ！」

ヒナギクが涙に濡れた瞳でハヤテを睨んだ。けれど、快楽に目を赤く染めて、息を乱している状態では、ちっとも怖くない。むしろとことん苛めて、かわいがってやりたくなる。

ソクリとハヤテの背筋を快楽が駆け抜けた。罵られれば、その分よけいに征服欲が刺激される。もっともっと苛めて啼かせて喘がせたくなくなってしまおう。

「それがヒナギクさんの望みですからね。僕に無茶苦茶に犯されたいんでしょう？　……ほら、締まった」

「ちが……」

言葉では否定しつつも、身体は正直にハヤテの言葉に逐一反応を示す。それは彼女の意思とは反しているものらしく、彼女自身も自分の変化に戸惑っているようだった。

「ヒナギクさんはぐちぐちぐちゅに掻き回されるのが好きですね。多少手荒に扱われたほうが気持ちイイんでしょう？」

「そ……んなことな……」

「本当に？」

彼はなおも否定するヒナギクをからかうように、ワンピースの裾から手を差し込み、固くしこった乳首を強めに摘んだ。

「ああ……っん！」

腰をビクンと跳ねさせたヒナギクは、次の瞬間、キツく締め付けている結合部からびゅつと愛液を溢れさせた。滑りが増して、抽挿がラクになる。

「僕はヒナギクさんのことが大好きですからね。大好きな妹のためなら鬼畜にだってなりましょう。でも、僕は優しいですから、あまり期待しないでください」

そう言うと、ハヤテはヒナギクの両脚を肩に担ぎ上げて、彼

女の腰を浮かせた。そして、肌を打つ音が響くほどに力強く、自らの欲望を叩き込んだ。

「痛っ！ ふか……いっ！ ……ひあっ、あっ！」

二人の間で掻き混ぜられ、泡立った愛液が、ヒナギクの臀部を伝って床に飛散する。

部屋に独特の臭気が立ち込め、ヒナギクから正常な思考を奪い去っていく。自分の立場とか、ハヤテに取っていた態度とか、すべてが霞がかったように深く考えられなくなる。

その中でヒナギクを占める感覚は、ただハヤテの熱が欲しいというものだった。痛みも甘い疼きも、まだまだ欲しくてたまらなくて、無意識のうちに食欲に腰を振ってさらなる刺激を求めてしまう。ハヤテが欲しくて身体が疼く。身体の最奥を乱暴にこじ開けられる感覚だけでは足りなくて、ほかも場所も苛めてかまってほしいと身体が訴える。

「うん、まだ足りないようですね。ヒナギクさんは欲張りだから」

ハヤテは楽しそうに挿入すると、上着のポケットの中を探った。指先に触れたものを取り出すと、彼はためらいなくそれでヒナギクの肉芽を挟んだ。

「ひんっ！ 痛……い」

ヒナギクが身体を強張らせる。突然敏感な器官を突き抜けた痛みが零れる。

けれど、ただ痛かったのは最初だけで、その後からは痛みとともに、ジンジンと痺れる強い快感が彼女の全身を駆け巡った。「ああ、痛いかもしれませぬね。ヒナギクさんってば、こんなここに腫れさせているんですから。敏感になりすぎていますかもしれませぬね。少しの刺激でもイキそうになってしまおうのでしょうか？」

彼はヒナギクを弄ることを心底楽しんでる。言葉で苛めている間も、彼の腰は間断なく彼女の最奥までを容赦なく刺し貫いている。

「そんなっ、だめ……ああんっ！」

彼女の内部は淫らに蠢きつつ、巧みにハヤテを追い上げていく。強く食い締められるたびに、ハヤテは息を詰め、苦しい吐息を吐いた。

けれどヒナギクの膣壁はそんな彼の様子にはおかまいなしに収縮している。そして時折、ハヤテが突くのと違うタイミングで身体を跳ねさせた。膣穴と先端の花芽の両方から同時に責められていることは、明らかだった。

「おに……ちゃん、なにコレ……。すっ……いのおっ！」

ヒナギクの肉芽は拘束されながら、気持ちよさそうにさらに勃起している。けれど、それが何による刺激なのか、彼女にはわかっていないようだった。

「こんなに締め付けて……。気に入っていただけたようですよ。良かったです。クリップに挟まれてイってしまってもいいんですよ？」

ハヤテが視線を落とすと、細い針金を楕円状にくるくる巻いたクリップが、ヒナギクの肉芽をしつかりと挟み込んでいた。

ハヤテの言葉を聞いて、ヒナギクが固まる。よもや、そんなもので自分の大切な箇所が弄られているとは、思いもよらなかったのだろう。

とたんに羞恥が甦る。文具でイカされるなんて、イケナイコトをしているみたいで、はずかしくてたまらない。

「やあっ！ クリップでいくのやあっっ！」

意識してしまえば、もう気になってしかたがない。無機物に苛められて感じてしまっている事実には、さらに興奮してしまう。



硬質な金属に戒められている肉芽が、ぶくりと充血して大きくなった。窮屈そうに針金を押し広げようとしている。

「ずいぶんドロドロに蕩けていますね。これなら、何されたつて気持ちいいんじゃないですか？」

ハヤテは手近にあったペン立ての中から油性マジックを取り出し、掌の上で具合を確かめた。両側からそれぞれ違う太さで書けるという代物だ。それをわざとヒナギクにチラリと見せた後に、彼は柄が太くなっているほうから、ヒナギクの尻に突き立てた。

「ふえ……？ ……あつ！ ひいああああんっ！」

普通なら痛みでとてもではないが入らないものを、今のヒナギクはハヤテの予想通り、易々と呑み込んだ。

「思ったとおりです。こつちの穴も十分にほぐれていたみたいですね。気付いていましたか？ ここも物欲しそうに、ずっとヒクヒクしていたんですよ」

半ばまでマジックを埋め込むと、穴を広げるようにグルグルと回した。ヒナギクの嬌声上がる。

「やああつ！ そんなもの挿れないでえっ！」

彼女はハヤテと繋がったまま腰を振ったが、太いほうから挿入されたマジックは彼女自身に締められて、引っ張らない限り抜けそうにない。後ろの穴まで広げられたヒナギクの秘部からは、はしたなくよだれが滴り続けている。

「どうですか？ 前も後ろも、三箇所同時に責められて、悦びすぎておかしくなってしまうのでしょうか？」

余裕たっぷりにかかわれても、もうヒナギクには意地を張る気力など、残されていないかった。

下半身が熱くただれて壊れてしまいそうなほど、ハヤテに感じさせられている。

「やつ……、なん、で……。ヒドイことされてるのに、……こんな、に、気持ちいい……なんてっ」

肉芽に深く食い込んだクリップが左右にピクピク振れている。「当然です。僕はヒナギクさんの気持ちいいことなら、なんだつて知っていますから」

ハヤテは小刻みに腰を振りながら、キツイ締め付けを楽しむ。「まあ、この程度のことしかしてあげられなくて申し訳ないですけれどね。次からはあらかじめねだっておいてくだされば、いろいろ用意しておきますよ。ヒナギクさんがちゃんと満足できるようになへんタイプレイができるように……ね」

言い終わるなり、彼はいつそう激しくヒナギクを突き上げ始めた。嬌声が悲鳴に変わる。ハヤテが腰を叩きつけるたびに、前後の拘束がさらに彼女を壊していく。もはや彼女はハヤテに弄ばれるままに啼き続けることしかできない。

ハヤテの欲望が硬度を増す。最奥の弁に突き当たった瞬間、彼の熱い精液がヒナギクの腹を満たした。

「ひあつ！ あああああああつっ！」

感極まって叫ぶと、彼女は無機物に苛まれたまま、意識を失った。

（ああ、いい夢みたなあ）

翌日、ハヤテは心身ともにスッキリした状態で、白皇学院のメインストリートを歩いていた。頬を撫でる風も爽やかで、じつに気持ちのよい陽気だ。思わず鼻歌だつて歌ってしまうというもの。だつて気分がいいのだからしかたがない。『夢』の内容を思い出して、ハヤテは人知れずにんまりとした。

昨日のヒナギクには驚いたけれど、こんなサブライズならば大歓迎だ。ツンデレで妹なんてハヤテの好物すぎて、つい暴走気味になってしまったことは、彼自身も自覚している。けれどもしかたがないのだ。あんなチャンス、そうそうあるものではないのだから。

強い風に吹かれて葉擦れの音が辺りに響き渡った。巻き上げられた髪を手櫛で整えると、ハヤテは満たされた気分であざとした茂みを見上げた。

昨日のことは、ずいぶんうまくいったと思う。

普段のヒナギクならば、恥ずかしがって昨日のようなことは絶対にさせてくれないが、一度スイッチが入った彼女は際限なく淫らに堕ちてしまうのだ。

それがわかっていながら、ハヤテだつてつい煽つてしまう。羞恥に苛まれながらも、身体の熱をどうにもできずに継り付いてくる彼女がかわいくてしかたがない。

しかもなぜか『妹』なんて設定らしく、いつもと違ったシチュエーションに、彼女自身も興奮していたのだらう。だからこそあんなに際どい行為にも悦んでくれたのだ。

だからきつとあんなこと金輪際ない。と思う。素に戻った彼女は、布団に潜り込んで目も合わせてくれなかったのだから。(本当にかわいいんだから)

だから、昨日のことは、いい夢をみたと思つてハヤテの胸の内に留めておくつもりだ。ハヤテだつて昨日のことだからかつて、ヒナギクに嫌われたくはない。

とはいえ、腑に落ちないといえ、たしかにそのとおりで。(でも、どうして急に『妹』なんだ？ 僕、なにか言つたっけ？) その時、メインストリート脇の木立の中から人の声が聞こえてきて、ハヤテはそちらに意識を向けた。

(ヒナギクさん？)

木の幹に隠れながら声の元に近づくと、そこには案の定ヒナギクと、もう一人、落ち着いた雰囲気少女が向かい合つていた。

(えっと、たしか生徒会役員の……愛歌さん？)

気になったハヤテは、こっそり二人の会話に耳を澄ませた。

ヒナギクのよく通る声が飛び込んでくる。

「……からって、あれはないじゃない」

いつもの無敵の生徒会長らしくなく、拗ねた様子のヒナギクは、意外性も手伝つてダイレクトにハヤテのツボを刺激した。

凜とした雰囲気を残しているものの、今の彼女は、なんだかこう……よしよしと頭を撫でてやりたい類のかわいらしさを放つている。こうしていると、かえって年相応の女の子に見える。

「なあに、ヒナ？ そんなにすごいことされたの？ 綾崎くんもやるわね」

落ち着き払つた返答に、ヒナギクのほうが慌てふためく。

「なつなによ、すごいことつて。た、たいしたことされてないんだから！ ヘンなこと想像しないでよ。」

必死にフォローしようとするも、愛歌相手にはあまり意味を成していないようだった。というか、逆にあのヒナギクが掌の上で軽く転がされているような印象さえ受ける。どうやら愛歌のほうが、ヒナギクよりも一枚も二枚も上手であるようだ。

「なあに？ 『ヘンなこと』つて？ 私なにか言つたかしら？」

「なつ、なつ……！」

「……まあ、そんなことはどうでもいいのだけど」

真つ赤になつて慌てて言葉を搜しているヒナギクの努力を一刀両断して、愛歌は真面目な口調で語りかけた。

友人の様子の変化に、ヒナギクは思わず及び腰になる。

「ヒナ。あなたはいいつも意地っ張りで負けず嫌いで素直じゃないけれど……」

「な、なによ」

戸惑うヒナギクに、愛歌は年長者のような静かな微笑みを向けた。

『妹』としてなら、素直に甘えられたでしよう？」

ヒナギクは言葉に詰まって、真っ赤になって俯いた。

素直な彼女の反応に、ハヤテも納得する。

（ああ、なるほど。そういうことだったのか）

『妹』になっていたのは、素直にハヤテに甘えたかったからで、その入れ知恵をしたのは同じ生徒会役員の愛歌だったというわけだ。

ヒナギクの行動が嬉しい反面、ハヤテの行動までも愛歌の思うがままであるようで、内心複雑だ。

（ヒナギクさんを見守れるのはこの学院では僕だけだと思っていたけど……これじゃうかうかしてられないな）

ハヤテは二人からそっと離れると、メインストリートに戻った。

時刻は現在4時半を少し回ったところ。例のごとくナギは登校もせず、家でゲーム三昧だ。食事の支度もすでに下準備は整えてある。ゆえに、ハヤテには時間があつた。

「さあて、生徒会室でも行くかなー？」

今日はたしか生徒会の仕事はないはずだが、とくに用事がないうときでも真面目なヒナギクが一度は生徒会室に寄ることを、ハヤテは知っていた。

そこでハヤテと顔を合わせたヒナギクがどんな反応をするのか、想像するだけでも楽しくなる。

（ホントに、ヒナギクさんってば、かわいいなあ）

声を殺して口元だけで笑うと、ハヤテはメインストリートの突き当たりにある時計塔に向けて、歩き始めた。

——— 終わり ———